

# 新書紹介

## 地方文化論への試み

埴 作 著

辺境社 B 6版 三六九頁 一、八〇〇円

Ⅲ雑感、Ⅳ日記抄の四章から構成されている。

たのであろう。

第二章の「茨城の歴史と文学」

では、「近代化を促すものと阻むもの」「水戸学の伝統」などにより為政者によって色どられた歴史ではなく、事実としての歴史の認識を訴え、人間の開放なくしては真によい文学の生れる素地がないと説いている。

最後の「日記抄」は、終戦直前から岩波書店の時代、茨城県史編さん事業を始めるころまでの日記を、そのまま載せたものである。

本の思想界をリードした雑誌であった。その編集に従事した著者が、茨城に移り住むことになったのは何か。「文化果つる地」へきてみて、人生を転換させたことの意味みたいなことを納得することができたかどうか」という問いかけに、「広い

東京では、世界が非常に狭かったが、茨城県に来て地域的には非常に狭いところだけれども、ある面では非常に広いところですね。」と答えている。東京をすてたのは、中央からの隠遁でも逃避でもない。都会の偽善的な生活を離れて、地域的には狭い茨城の、ある面での広さを感じたりと見すえようとしたのではなかろうか。そして、住民の生活の根底にある歴史的な泥くさい生活意識に目を向け、これを改革していくことが、文化を育てる上で大事なことだと考

最愛の母、姉、弟までも戦争でなくし、組合活動に奔走しながら、上司との軋轢に悩み、酒を飲んで体をこわして行く。我々年代ならこうした話は身近か

日本人の日常の行動原理は、近隣あるいは世間の思惑を基準にしているといわれる。若い時は、理想主義を掲げている人も、大人になるに従って、環境への順応を余儀なくされているのが現実である。

著者自身、「私にとって、敗戦直前から現在にいたる年月は、私なりにではあるが、ほんとうに多端であった」と述懐している。これは、戦中、戦後を生きてきた人達にとって、大なり小なり共通する感慨と言えよう。著者は、昭和三十八年、長い都会生活にピリオドを打ち、後進県と言われる茨城県へ移り住む。そこで県史の編集を通して県民意識の自己改革に情熱を

第三章の「雑感」では、「紀元節の亡霊」「前時代の残滓」等現代社会や地域社会の矛盾について、歴史家としての大胆な意見が述べられている。封鎖性の強いこの地域で、お国自慢となつていもの科学的なメスを

本書は、「地方文化論への試み」という題名が示すように、文化論を大上段にふりかぶって著してはいない。むしろ「一科学者の生きた戦後史」ともいえる地味な著作である。しかし、文章の端ばしには、文化への貪欲な志向と情熱が何え一人の人間の生きざまの誠実な記録でもあるだけに読む人の心を打つものが多い。

教育委員会事務局 教育文化センター文化事業部文化事業課 事業係長 横前丈夫

「地方文化論への試み」の著者は、その数少ない一人であろう。

これは、戦後の三十年を、生活苦と戦いながら、常に自己の向上を求め、人間として、どう

本書は、I 東京をすてて十余年、II 「茨城の歴史」と文学、

III 雑感、IV 日記抄の四章から構成されている。

第二章の「茨城の歴史と文学」では、「近代化を促すものと阻むもの」「水戸学の伝統」などにより為政者によって色どられた歴史ではなく、事実としての歴史の認識を訴え、人間の開放なくしては真によい文学の生れる素地がないと説いている。

これは、戦後の三十年を、生活苦と戦いながら、常に自己の向上を求め、人間として、どう生きたらよいかを追求した記録

本書は、I 東京をすてて十余年、II 「茨城の歴史」と文学、

III 雑感、IV 日記抄の四章から構成されている。

第二章の「茨城の歴史と文学」では、「近代化を促すものと阻むもの」「水戸学の伝統」などにより為政者によって色どられた歴史ではなく、事実としての歴史の認識を訴え、人間の開放なくしては真によい文学の生れる素地がないと説いている。

最後の「日記抄」は、終戦直前から岩波書店の時代、茨城県史編さん事業を始めるころまでの日記を、そのまま載せたものである。